
フェアリーテイル 神と悪魔の力を持つもの

カンザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーテイル 神と悪魔の力を持つもの

【Nコード】

N7380M

【作者名】

カンザス

【あらすじ】

悪魔と神と契約した少年は妖精の尻尾に入る。
そこから始まる物語は神と悪魔の・・・

ハヤト

少年は魔法を唱える。

その魔法は無差別に人を殺していく。

その少年は大量の人を殺していった。

そして、それは今悪魔の惨劇と呼ばれている。

「ふあゝあ、まだ眠いな」

「オゝイ、ハヤト早く起きて出てこゝい」

「あいつ」

「ナツか。朝っぱらからデカい声だすなよ」
そう呟き、着替えをすませる。

「で、今日は何のようだ？」

家を出てナツに聞く。

「ハルジオンにイグニールがいるらしいんだ」

「で今から行くと」

「おう」

「じゃあ行くぞ早くしないと面倒だからな」

列車に乗りハルジオンに向かう。

「なあナツその乗り物酔いは何とかならないのか？」

返答はない。

「もう話すことすら無理か」

「おいナツ着いたぞ」

「もう列車には乗らん」

「はいはいそうですか」

ナツの腕を引っ張りながら列車を降りる。

「さあ、今から探すのは竜ドラゴンだな」

「決まってるだろ」

「あい」

「さあ行くぞ」

とりあえず街の中を歩き回るが、ドラゴンがいた感じすらない。

「なんでだよ！！ もうかなり歩き回っただろこんなにいないのは何かの陰謀か」

「いやそれはないと思うぞ」

「あい」

「ちっ、魔法使つか」

「きゃーきゃー」

「ぐへえ」

突然来た女達に殴られ蹴られ最後に踏まれた。

「大丈夫か？ ハヤト」

「あい」

「大丈夫なわけあるか」

起きた瞬間にキョロキョロし出す。

「どこ行きやがった。殺す」

遠くに人だかりを発見。殺

「行くぞナツ！！」

「おいっ」

ナツの返事を聞かずに走り出す。

「殺しはだめだろ」

追いついた。

サラマンドー
「火竜様」

「火竜？ イグニールのことか？」

「ハヤト待てよ」

「ナツイグニールがいるぜ」

「本当か！！」

ナツは人だかりの合間を縫って真ん中に出た。

「イグニール！！」

「はっ」

「誰だお前？」

「火竜と言えばわかるかね？」

ナツはもう去っているところに話しかけているので気味が悪いな。

「ナツどうだった？」

「違った」

「大体火竜ってお前のことだぞ」

「えっ」

「まさか火竜出探しに来たとはな」

「何で教えないんだよ」

ナツが切れ気味に言う。

「だって俺が聞いたのはイグニールがいる。だぜ分かるかよ」
ナツが引つ張られていった。

なにやらワ〜ワ〜言ってるな。

それよりあいつボラじゃないか
「お〜い、ボラどうしたんだ魅了^{チャーム}なんか使って、火竜なんか名乗ってるしな」

「誰だい君は僕は君なんか知らないよ」

「思い出させてやろうか？」

我は契約せし者 魂の代償により作られし 契約の元に従え
地獄の業火よ ヘルプロミネンス」

呪文を唱えた瞬間に空間に穴があきそこから火が飛び出す。

その火はハヤトの手に巻き付く

「思い出したか？」

「妖精の尻尾の魔道師ハヤト」
フェアリーテイル

「そうだよ。じゃあ何で魅了なんか使ってるんだ。嘘ついたら焼け死ぬぞ」

いつの間にか女達は一人を残して消えていた。

「他国に売り飛ばすために」

「本当らしいな。さあおとなしく捕まってくれ」

「いやに決まってるだろ」

炎を手に出し放つがハヤトの火に消される。

「なあ、そのあんた」

「私!？」

「あんた以外に誰がいるんだよ」

「はあ」

「軍隊はどこだ？」

「あっち」

指を指したのでそっちを見る。

「そうか。ボラ吹っ飛べ」

走ってボラに近づき蹴りとばす。

「じゃあね」

ハヤト（後書き）

中途半端に終わってすいません。次話投稿は早いと思うのでよろしくお願いします

悪魔の力

「あちゃゝ海の方に行っちゃったかなゝやっぱり蹴りじゃなくてパ
ンチいやナツに任せりやよかったな」

「おゝいハヤト何ぶつぶつ言ってたんだ？」

「いや別にそれよりまたイグニールじゃなかったな」

「ああ」

「あなたフェアリーテイルの魔道師なの」

「あんた誰だよ」

金髪のミニスカートをはいた少女が聞いてきた。

「あたしはルーシィ。さっきあなたのことフェアリーテイルの魔道
師だって」

「そうだけど」

「あたしをフェアリーテイルに入れて」

「いいよ」

「突然言われてそりゃ困るだろうっていいの!？」

「別にはいるのに何かいる訳じゃあるまいし」

ゲイト
門の鍵

「あんた星霊魔道師か？」

「そうだけど」

「そっかじゃあナツ後は頼んだ。俺先に帰るから」

「おう」

「ちよつとまってご飯くらいおごるから」

「いやいい」

星霊か、俺の力はいつ等に嫌われてるからな

「じゃあな」

列車に乗る。

目の前にはナツ達。

「ナツ俺は頼んだはずだが」

「いやルーシイが無理矢理」
「あい」
「あなたあたしを避けてない？」
「避けてますが」
「やっぱりね」
「はあめんどくさいなあ」
「なんであたしを避けるの？」
「あんたが星霊魔道師だからだよ」
「えっ？」
「俺の魔法は見たな」
「ええ」
「どんな風に見えた？」
「お前等の魔法ににてただろ」
「まあ少しは」
「お前の魔法は星霊俺のは悪魔なんだよ」
「どういうこと？」
「鍵が今振動してるだろ」
「えっ」
「ルーシイは鍵にさわる」
「本当だでも何で？」
「理由は簡単だ。俺を殺したいから今にも出てきそうなんだよ」
「でも」
「以上だ。俺があんたを避ける理由わかったか？」
「ちょ」
「席を移る。じゃあな」
「これでいい。俺は人を避けなくちゃいけない。
咎を背負う限り。」

悪魔の力（後書き）

早く更新したいと言って遅い

すいませんでした。土日事情があり更新できず。

やっと書けた。ルーシィを避ける主人公。理由は実はほかにもある・・・

以上カンザスでしたゝ

妖精の尻尾

目の前にある大きな建物。三階立ての建物には看板がありそこにはFAIRYTEIL（妖精の尻尾）と書かれていた。

「わぁ大つきいね」

「ようこそ妖精の尻尾へ」

「早くはいるぞ。そんなとこにいちや邪魔だろ」

「待ってよ」

「ルーシイ何でそんなに俺に絡んでくるんだ？」

「確かに」

「あいつ」

「なんとなく初めてあつた気がしないっていうか」

「っ」

「どうしたハヤトもしかして腹でもこわしたか」

ナツそれは嫌みか？

「どうでもいいからはいるぞ」

ギルドの中にはたくさんテーブルやイスがあり。もう酒場みたいな感じだ。

「ただいまー」

「ナツ、ハッピー、ハヤトお帰りなさい」

迎えてくれたのはミラジエーン。彼女は少しウェーブのかかった金髪を腰辺りまでのばしている。ちなみに妖精の尻尾の看板娘だ。

「また派手にやらかしたなあ。ハルジオンの港の件、新聞にのっ」

と言っている途中なのにナツは跳び蹴りをかました。

「テメエ！！ 火竜の情報嘘じゃねえか！！」

「あら・・・ナツが帰ってくると早速お店が壊れそうね」

「ミラ少し頼みがある」

「ハヤト何か用？」

「そこに新入りがいるから頼んだ」

「へえゝあなたもすみに置けないはね」

「からかうなよ。俺は寝るから頼んだぞ」

「はいはい」

そういつてギルドを出ていく。そして石造りの道を歩いていく。

家が見えてきた。近くに水路があり涼しい気がする。しかも、家賃七万でかなり安い方で、商店街が近いけど対して意味はない。

いえに入ると一人暮らしでは使いきらないほど広く。しかも掃除はしていないので床に散らかった服がある。そしてそれに皮肉なほど白い壁が目に入る。

そしてベッドにはいる。

起きてすぐに着替えをする。

「ナツが呼びにこないなんて珍しいな」

ギルドに言ってみる。ちなみにギルドは町の中心のカルディア大聖堂を抜けてまっすぐ行つたところにある。

ギルドの中は相変わらずうるさい。

「あらハヤトナツと一緒に رفتたんじゃないの？」

「何の話だよミラ」

「だってナツはマカオを助けに行つたじゃない」

「そうか。じゃあしばらく休むかな。金に困つてないし」

「なら買い出しについてきてくれない？」

「なんで俺が」

「暇なんですよ」

「あい」

少し脅し気味に言うのでハッピーになってしまった。

「ヒューヒュー、ハヤトやるねえ」

そういったのはグレイ。黒髪でボサボサした髪をしている。ちな

みに今の服装はパンツだけだ。

「お前は何でそんなに服を脱ぎたがる」

「ああー」

「気づいてすらなかったのか」

「あらちょうどいいわ。二人でコレ買ってきて。お願いね」

ミラはウインクをしてどこかに行ってしまった。

「行きますか」

「ああ」

商店街に着くとミラに渡されたメモを見る。コレどんだけ買わせるつもりだよ。

「グレイ俺はこんなの売ってるところ知らんぞ」

「俺もだよ」

ビールコレは分かる。パスタコレも分かる。火のつきやすいパスタと火のつきやすいチキンに火のつきやすい飲み物。

「なんだよこれ」

「ナツのだろうな。火のついたのなんてナツ以外食えん」

「ちっ、あの火め」

「まあわかるのだけ買ってかえればいいよな」

そういつてビールとパスタだけ買う。

「そういえばハヤト。何でお前ナツとチーム組んでんだ？」

「理由はない。別にお前と組んでもいいんだしな」

「ふうん」

そして買い終わったので帰ると、ミラに足りないんだけどと言われたがそんな変な食いもんは知らんと言って逃げた。

妖精の尻尾（後書き）

どうもカンザスです。次の話も今日中に投稿するのでよろしくお
願いします。

下手なので感想&意見をください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380m/>

フェアリーテイル 神と悪魔の力を持つもの

2010年10月8日12時04分発行